

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 ル・コルビュジエ『小さな家』からの引用を含む二つの文章を並置し、視覚装置としての窓の機能をめぐる両者の見解を正確に理解できるかを問うた。【文章Ⅰ】は、柏木博『視覚の生命力——イメージの復権』（岩波書店 2017年）より一部抜粋したもの（約2,730字）、【文章Ⅱ】は、呉谷充利『ル・コルビュジエと近代絵画——二〇世紀モダニズムの道程』（中央公論美術出版部 2019年）より一部抜粋したもの（約1,480字）である。前者では、外界を切り取ることで風景の認知を可能とする窓の機能について論じられているのに対し、後者では、外界を遮ることで観察主体の視点を固定し、「瞑想」の時間をもたらす窓の効果が強調されているが、ともに窓を通して人間と世界との関係性を明らかにしようとした点では共通している。

問1の(ii)では、今年度も字義を問うたが、従来の漢字問題と比べれば正解率は低かった。問2では、【文章Ⅰ】について、正岡子規にとってのガラス障子の存在意義を問い、問3では、それを理論的に捉え直す力を問うた。問4では、窓に対するコルビュジエの先鋭な問題意識を問うたが、選択肢相互の微妙な違いを判別しにくかったためか、正答率は低めであった。問5では、【文章Ⅱ】に示された、「沈思黙考」に通じる窓の機能を問うた。それらをふまえ問6では、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読み合わせることで見えてくるものを生徒の会話として示し、(i)で両者の違いを、(ii)(iii)で子規を媒介とした連続性を問うた。(ii)の正答率が高く、全体としては適切な問題であった。大問全体としては、引用文の重なりに着目しつつ、二つの文章の共通点・相違点を論理的に明らかにする良問であったと考える。

第2問 本文は、戦争終結直後の食糧難の時期を舞台とした作品である。「私」が、自分を取り巻く様々な状況や出来事を「食糧」や「飢え」の観点からとらえていくことや、そこから生じる「会長」との齟齬、それぞれの場面における「私」の思いの推移について、叙述から読み取ることが求められる出題とした。全体の得点率は6割台前半であり、かつ各成績層に対応したものとなっているため、受験者の基礎的な読解力を測ることのできる適切な問題であった。

問1は、「私」がとらえていた「大東京の将来」の構想を作る目的と会長のそれが異なることをふまえながら、「私」の様子を捉えさせる問題である。正答率も7割と冒頭の基礎的な理解を問う問題として適切であった。問2は、傍線部の直前にある会長の言葉を元に、傍線部での「私」の心情の理由を問う問題である。正答率も8割あり、文章理解力を測る問題として適切であった。問3は、老翁が置かれた状況と「私」が置かれた状況をふまえながら、「老翁」の描写に対する「私」の思いや行動について捉えさせる問題である。正答率の成績分布として、最下位層が3割台半ばに対して最上位層が8割台前半と適切に分布しており、読解力の力量を測る適切な問題であった。問4は、「私」の周りにいる様々な人々のことを思い返しつつ、自分の将来について考えたときの「私」の反応について捉えさせる問題である。解答の選択が分散しており、

適切な問題設定と選択肢であった。問5は、「私」の周りにいる様々な人々のことを思い返しつづ、自分の将来について考えたときの「私」の反応について捉えさせる問題である。正答率は若干低かったが、下位層から上位層まで適切に分布しており、読解力の能力差を見る問題として適切であった。問6は、期待した給料を得られなかったことに絶望したことを機に、「私」の考え方が大きく変化する場面について、その変化の内容と背景をなす「私」の心情を捉えさせる問題である。正答率が8割を超えて高くなっているが、各層に対応した分布から、誤読を排除することができる読解力を問う適切な問題であった。問7(i)は、本文の理解をより深めるために、終戦前後の広告を含む【資料】を用いて考察するという学習場面において、文章の完成度を高めていく問題である。正答率は4割前半と低くなっており、ポスターなどの非連続型テキストなどの複数の情報を組み合わせて読むことに課題が見られた。最上位層の正答率は6割を超えており、思考力を問う問題として適切であった。(ii)は、終戦前後の広告を含む【資料】を用いて考察するという学習場面において、本文と【資料】とに共通する象徴性を捉え、適切な結論を導く力を問う問題である。正答率は5割台半ばで、下位から上位までの分布も適切であり、複数の資料から思考を深めていく問題として適切であった。

第3問 問題文は、平安時代の『俊頼髓脳』と『散木奇歌集』からの出題で、作者はともに源俊頼である。後冷泉天皇の時代、実家に退出した皇后寛子のために殿上人らが遊宴し、連歌を行おうとした場面を取り上げている。『俊頼髓脳』は教科書にも載る受験者になじみのあるもので、内容理解もしやすい作品であった。出題箇所についても、敬語を含め、古文特有の語句が多く用いられており、古文を的確に読み取る力、またその内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であった。問1は、本文の読解に必要な基本的な単語の知識および、内容を理解する力を問うた。現代語にも文語的に残る語彙についての理解が特に低かった。問2は本文の読解に必要な基本的な文法や敬語の知識および、本文の表現を理解する力を問うた。問3は、1～3段落に書かれている登場人物の言動を的確に読み取る力を問うた。問4は、(i)『散木奇歌集』の内容と掛詞の知識を踏まえて、連歌を的確に読み取る力を問い、(ii)は(i)を踏まえて、『俊頼髓脳』における連歌の上の句を的確に読み取る力を問い、(iii)は話し合いにおいて、他の生徒の意見を踏まえて4・5段落に書かれている内容を的確に読み取る力を問うた。本文とは別の文章と比較的長い対話文を読んだ上で設問に答える必要があり、会話文そのものに設問指示や補助的情報を含み込む点で、多くの情報処理が要求される場所であったが、難易度として適正であった。

第4問 日本文学にも影響を与えた唐代の代表的詩人である白居易が官吏登用試験のために苦勞して受験勉強を行っていた際に、彼自らが作成した【予想問題】とそれに対する【模擬答案】を題材とした。現代の入学試験で出題される小論文の問題を自分で予想し、その答案を準備して試験に備えるという受験勉強と同じ構図であり、共通テストの受験者にとって身近に感じられたと思われる。

本文は賢者を求めるにはどうしたらよいのかという問いを設定し、それへの答案として白居易が自らの考えを論述したものである。白居易が皇帝に提出することを想定して作成した文章なので、しっかりとした論理で書かれており適切な素材文だと考えられる。

問1は語句の意味、問2は文章の解釈、問3は返り点・書き下し文の理解、問4は本文に用いられた比喩の理解、問5は文脈を的確に捉え空欄に入る語の選択、問6は本文の最後にある「自然之理」の意味、問7は本文のまとめとして【予想問題】に対する【模擬答案】の答えの内容について、それぞれ問うた。各設問については「国語総合」で学習した内容を理解しているかどうかを考慮して出題した。

全体として識別力も高く、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 論理的かつ抽象的に書かれた文章の論理展開や内容を的確に読み取る力を問う問題を配置したが、高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当であり、設問のあり方や難易度、配点は適切であったと評価された。特に問6については、生徒どうしの話し合いの中で二つの文章を比較して差異を見出し、内容の理解を深めていく学習過程が意識されており、受験者の日頃の学習活動を踏まえたものであるとの評価を受けた。今回は、昨年度の【メモ】の形式ではなく、以前のセンター試験でも出題実績のある会話型を採用したが、対話的な学びを通して理解を深める形式は複数の文章を比較する学習過程と親和性があったと考えられる。

第2問 出題文については、「私」の心情を描いた文章であり、「私」の内面の描写が丁寧で、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であったとの評価を得た。

出題の難易度として、心情や表現を問う設問に加え、本文に関係する資料を参考にして社会状況や心情を考察するなど、難易度として適切であり、「書くこと」の指導事項にもつながる出題の工夫が見られたと評価していただいている。ただ、【構想メモ】を作り、さらにそれを受験者に読ませる必要があったかどうか検討の余地があるとの指摘があるため、学習場面の出題についてはさらに検討していきたい。

第3問 古文を的確に読み取る力、その内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であり、文章量、難易度とも適切であったとの評価をいただいた。また、連歌を題材とした本文の内容を理解するために他の文章を参考として読み、表現や修辞について考察する学習課題など、授業改善の視点において大いに示唆に富むものであった、との意見を頂いた。表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく適正であり、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた、との評価であった。問4の(i)(ii)(iii)は、いずれも選択肢の数について配慮がなされていたが、解答に時間を要した受験者が一定数いたのではないかと、との意見を頂いた。今後問題数や時間配分に留意し、受験者の学習の成果が的確に測れるような素材の選定と出題を心がけたい。

第4問 問題文の選択や分量、問題の形式、設問のあり方および難易度にわたり、概して肯定的な評価を受けた。特に白居易自らが作成した【予想問題】とそれに対する【模擬答案】という新傾向の問題文の形式については、「同一の筆者による文章ではあるが、問答形式の体裁をとっており、【予想問題】の趣旨を適切に踏まえた上で、【模擬答案】の内容を叙述に従って精査・解釈しながら読み深めていく力が問われており、問題作成方針に合致している」として評価された。問題文の形式について工夫を凝らし、受験者の学力を適切に測ることができるように努めた。設問に関しては、「基本的な語句の知識や、比喩表現が意味する内容を問う設問があり、漢文の学習成果を見る難易度としては適切であった」との評価を受けた。更に問題文の表現や用語も適正であり、配点についても設問の内容に見合っていたと評価された。今後も適切な素材を採用し、設問の難易度や配点などを考慮し、受験者の学習成果を的確に測れるような出題を心がけていきたい。

4 ま と め

第1問 本試験では、文章を的確に読解する能力を問う問題を基本とし、その上で複数の文章から得られた情報を比較・検討して解釈する能力を問う問題構成を意図した。素材文・出題内容・

難易度については適切であり、学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問は、高等学校での学習を通して身に付けた力を評価するのに妥当であるとの評価を受けた。今後も生徒の学習の過程を意識した問題作成に努めたい。

第2問 基本的な読解力を判定する上で適切な出題であったといえる。学習場面を設定した設問については、【資料】と本文との共通点から登場人物の置かれた状況について考察し【構想メモ】と【文章】を作成する言語活動は授業改善の視点において大いに示唆に富むものであると、実際の学校現場の学習活動に接続し得る設問として評価を得た。受験者にとっての「わかりやすさ」と、出題側が求める能力と問い方との相関については、今後も難易度に配慮しつつ、さらなる改善に努めたい。

第3問 文法・敬語・単語などの知識を活用しつつ、文脈を踏まえて考える設問や、本文とは異なる資料を読み取らせることで本人の理解を深めさせる設問など、古文の学習成果を見るための問題として適切なものであった。今後も入念に素材を吟味し、受験者の思考力・判断力・表現力等を測れるような問題作成を心がけたい。

第4問 出題にあたっては、白居易の受験勉強という受験者にとって身近で共感しやすい内容を選び、問題文の分量を考慮し設問の難易度を調整した上で受験者が取り組みやすくなるように努めた。【予想問題】とそれに対する【模擬答案】という問題文の形式、設問のあり方、難易度については適切であったという評価を受けた。今後も素材文を吟味して厳選し、問題作成に当たっては、知識を問う問題、解釈や読解力、思考力・判断力・表現力等を問う問題等の配分に留意し、「国語総合」で学習する内容を踏まえてバランスよく問う出題を検討してゆくことが求められる。